２０１２年度　「中国　大連・東北部通信」 NO.５　７月 26 日

駐大連北九州市経済事務所
◆所　長　田代　昇三　◆副所長　辛川　公浩
◆副所長　呂　俐　　◆主　任　劉　振傑
田代 e-mail： yumeiyasu4411@yahoo.co.jp

大連市でも分別収集　テスト試行！
廃品分別回収センターに、再生資源を持ち込むと、量に応じて現金・商品がもらえる。

昨日、我が市の廃品分別モデル事業が正式に開始された。市環境衛生部門の関係責任者の説明によると、年内にモデルセンターとして廃品分別回収センターを２カ所増設する予定で、またその様子を見ながら全市に広めるかどうかを慎重に検討する、とのことだ。

2012/6/6　大連日報より抜粋

北九州市に限らず、日本ではゴミの分別回収は至極当然のように行われている。環境に配慮し、再利用できるものは再利用していく、というスタンスのもと行われているのであろう。ここ大連では近年、北九州市も関わっている大連生態工業モデル園区（いわゆるエコタウン）に代表されるように、環境保護に対する意識が高まっているように感じる。今回の試行事業もその一環と考えられる。

今年２月、大連市はリサイクル事業を先述したエコタウンのみで行う、現在リサイクル事業を行っている企業についても３年以内にエコタウンに移るようにする条例を発布した。今回の分別事業もその流れの中にあるものではないのだろうか。筆者の推測ではあるが、おそらく回収されたものはエコタウンに運ばれ、加工再利用されるのであろう。

今回買取対象となっているものは「リサイクル可能な資源」として紙類、プラスチック類、ガラス類、金属類、布類、「有毒有害な物質」として電池、蛍光灯、水銀温度計（日本では既に死語となっているが・・・）が挙げられている。それらを量りにかけて重さにより賞品を与える、というものである。尚、大豆油は最も良い賞品で、買取価格５０元以上に達した際にもらえる賞品である。

このように考えると、新聞や雑誌を持って行ってトイレットペーパーに換えてもらう廃品回収に似ているように聞こえる。今回の大連の試行事業はこれらの賞品はあくまで副賞であり、基本はゴミの買取制度である。ゴミを持ってきた人は当然現金がもらえるし、協力したお礼として賞品ももらえるという制度なのである。

ただ元来から大連でもゴミの買取制度は存在した。当事務所にもよく来るが、新聞を買い取ってくれる業者がいたり、道のゴミ箱を漁ってペットボトルを回収したり、無料で開放されている展覧会に行ってブースのパンフレットを根こそぎ持っていったりする輩は多々存在する。それらの回収されたものは点在する買取業者によって換金され、彼らの生活源となっている。今回特筆すべき点は「有毒有害な物質」が追加された点、かつ今までの買取に加え、賞品を提供することで回収意欲を高めるように仕向けた点であると思う。

尚、今まで、特にマンションなどでは分別回収の概念は全くなく、住んでいる階層にあるゴミ捨て場にとりあえず叩き込んでおく、というのがゴミ捨ての基本であった。生ゴミだろうが、電池であろうが一つのゴミ箱に捨てれば事足りた、というのが実情である。

因みに今まで分別されてなかったゴミはどうなっていたのかというと、すべて埋め立てられていたのである。アジア No.1 の広さを誇る星海広場もその埋め立てにより作られた、ということもできる（厳密にいうと埋め立てによりできた広場を当初ゴミ捨て場に利用していたが、大連市１００年記念の際に星海広場として整備された）。

この点についてもメスが入り、現在はゴミ焼却による火力発電も開始され、ゴミの焼却による発電で１．４７億ワット、年間５万世帯分の電気が供給されるようになった。

大連市は北九州市同様、国連環境計画（UNEP）の「グローバル 500」を２００１年に受賞している。環境都市としては中国国内でも有数であるが、環境に直結するゴミ処理という点においては上記の通り優秀であったとは言えない。今回はその点に変化が加わり、より一層環境保護というものに重きをおいている姿勢が出てきているように思える。

このような対民間のことに限らず、現在建設中の経済園区は口を揃えて「自然との共存」「環境の保護」を謳っている。大連市が現在環境プロジェクトを重点項目としているのは明白である。今後の大連市を考える際、「環境」という言葉が一つのキーポイントになっていくのではないかと思う。